新著紹介

現代思潮より見たる佛教の根本思想

友松圓諦譯補

本書は獨逸現代の佛教學者ホフマン氏が（Ernst Hoffmann）が一九一九年に印度のアグラ（Agra）でものした書である。原書は左程大部なものでもなく、『佛教の根本思想及び神觀に對するその關係』（Die Grundgedanken des Buddhismus, und ihr Verhältnis Zur Gottesider）と題する者を、その内容から斯うした書名に書き變へたのは譯者の苦心の存する所である。原書は一九二〇年ライプチヒから出版されたが、一體大戰後の西洋人特にアメリカと獨逸とでは、非常に佛教研究熱が沸騰して來て在來の基督信仰を土芥の如く打ち棄つる者が少なからず目立つやうになり、中にはトルストイの感化に成るやうな基教仇敵視の傾向さへ擡頭するに至つたのは、吾人佛教國民に對して興味ある注意を喚起して呉れるものであらねばならぬ。著者は始め、『基督教の一人の熱心なる信者として、その基督教の理想を發展さに自己を沈潛せしめてゐた』のであつたが、基督教の現狀が如何に原型から遠ざかつて來てゐるか、又はその本質が殆んど知られずに誤傳されてゐることを漸次感付くに至つて、基督の眞精神が猶太的に存するよりも寧ろアーリヤ的に在ることを自覺されたと言ふ。之が抑々著者が佛教研究に意を轉じた最初であるらしい。既成宗教の桎梏を打破つて唯一の眞理を自ら探求せんとし、教會から分離して佛陀の教へを信仰する一比丘となるまでの著者が胸中に燃えた求道苦悶の煩は遂に斯うした一書の光明として、廣い人間の社會に打ち出されるに至つたのである。斯かる經歷から推しても、本書が如何に熱を持つた信條に溢れてゐるであらうかを想像せしむるに足るのであるが、吾人は卷を披き讀み了つて果してその期待の空しからざるを嬉しく感じた者である。先づ著者は基督教に於ける人格神や創造神の寓意の衣を脱ぎ去つて赤裸々の否定論を急先鋒として論じ立て、佛教の根本思想としてそが如何に合理的普遍妥當的宗教なるかを闡明せんとし、佛教の目的、眞の存在、存在と世界、生命と苦惱との連鎖、世界論、解脱論、及び涅槃論の七章に亘つて原始佛教の要點を述べてある。解釋としては多少の難點や行き過ぎがないとも限るまいが、一般に引用の巴利聖典々據が宜しきを得てゐるため、讀者に共鳴せしむる所は太だ多い。更に進んで佛教の思想と神の觀念との比較を論ずるに至り、トルストイの理性的神格を拉し來つて佛教の内在的體驗の神と引き合はした邊は非常に興味を以て讀者を引きつける所がある。尚ほ最後に附錄として一元論的佛教の世界觀の圖相的説明なるものが載せてあるが、之は極めて難解の者で、寧ろ著者の手控へとでも言ふべきものではなからうかと思ふ。且つ本書の譯者が本の前後に數十頁を費して自己の抱負と本書飜譯の成立との關係を縷々詳説されてゐるのは、一般讀者に少なからぬ熱と興味とを與ふることであらうと信ずる。譯文は先づ結構であるけれども印刷の誤植の豐富なると、挿入の巴利語句の十中八九誤つてゐることゝ、中には頁が入れ違へた製

本の杜撰な所なども眼障りになつて、どうか速に此の難點の匡正される日の一時も速かに來らんことを此に祈つて置きたいと思ふ。佛教及び基督教研究者のために切に一讀をお勧めする。(定價貳圓東京麹町區山元町一ノ三、新光社發行)—(手島文倉)

原始佛教思想論

文學博士木村泰賢著

原始佛教の研究に關しては、英國や獨逸その他に於ても多くの碩學と諸種の研究發表とがあるが、否、泰西佛教學者の大半は唯佛國大家等の除外例を別としては、殆んど皆巴利聖典の研究者と評して宜い位であるけれども、惜しい哉彼等は大乘佛教に對して餘り多くの同情を持つてならぬやうである——無ろ持ち得ない事情にあるのであらうが。然るに本書は此の缺點に重心を置いて、『特に大乘思想の淵源に注意して』と表題して原始佛教思想の一般を論究せんとしたので、本書の特色は全く此の點になくてはならぬと思はしめる。然し斯う期待して大乘思想の興起と原始佛教との脈絡が十分闡明されることであらうと豫想して讀みかゝつてはならない。夫れは如何に大乘佛教の空氣中に育つた吾人を雖も、甚だしい獨斷と臆說と空想とを振り撒くに非れば到底望み難いほど資料に於て缺乏してゐるからである。先づ本書に進ぶる位の所が實際の文獻に根據を持つた立論であるかも知れないが、吾人は著者が資料を惜しまず今少しく想像を逞うした思想發展論を讀まして呉れるであらうことを期待してゐた者の一人であつた。

本書は三篇より成り、第一篇を大綱論として原始佛教當時の社會を說明し、傍ら佛教々理の綱格を概示せられ、第二篇は事實的世界觀の題下に苦集二諦を說明せられ、更に第三篇に入つて理想とその實現の題下に滅道兩諦を說かれてゐる。而して一讀者の率直な感想を記すと三篇中最も說明に於て巧みを極めたものは第二篇であり、聖典引用に成功せられたのは第三篇であり、第一篇は單なる序論として餘りに重要でないやうな、今少し簡單に往けそうな感があつたやうである。兎もあれ著者が海外旅行の途上、敢て常人の企て得ざる大勞作を斯うまでシステ、マテイツクに綱みあげられた努力に對しては、吾人は心から驚嘆と感謝の念を禁ずることが出來まいと思ふ。それは前記ホフマンの原書ほど熱に於ては足りないかも知れないが、原始佛教の思想を論究した點では遙かに泰西學者の及ばない所があらうと信ずる。阿含經磨佛教の由來變遷や引いて印度佛教史一般の研究が、一日も速やかに同じ著者の手から發表されんことを今から指折り數へて待つてゐたいと思ふ。著者に重れて努力を渴望したい所である。而して我邦の一般佛教徒特に苟も寺院の生活をするほどの大德方は、少なくも本書を一讀再讀して竭きざる興味を覺ゆるやうになられんことを切に〳〵祈る次第である。(定價四圓、東京内午出版社發行)—(手島文倉)

寄贈書籍雜誌

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、日華公論、教育研究、内外教育評論、學校教育、教育學術界、教育時論、教育界、精神運動、國際聯盟文化運動、藥王樹、三田文學。